

東アジアでの情報、文化、人の移動に関する展望

ANEPR (2004年1月16 - 17日)

横山禎徳

世界で最も乗客の多い国際航空路線トップ10のうち5つまでがアジアにある。香港 台北が年間約450万人でダントツの一位であり、その他、バンコック 香港、ソウル 東京、香港 東京、バンコック 東京が入っている。ヨーロッパ都市間にB-747やエアバス380が飛んでいることはないが、アジア地域では頻繁に飛んでいる。すでに長年にわたって膨大な数の人が移動している地域なのである。

しかし、不思議なことにSARSは日本でも韓国でも広がることはなかった。その他アジアには伝染性の病気はまだ多いのだが日本国内で少なくとも今のところ広がったという事件はおきていない。日本の航空検疫がとりわけ優れているとも思えないのは東南アジア諸国の旅行から帰ると分かる。しかし、日本政府はこれまでも海外の伝染病を水際で抑えてきた。グローバリズムにおける国家の役割は案外こういうところにある。

確かにSARSによって日本企業の中国における業務は支障をきたした。人の行き来を制限したからである。航空業界も旅客数が減り、業績に影響を受けた。しかし、このような事件が人の移動を長期的に減らす方向に働くことはあり得ない。人は意識してか無意識かに関係なくリスクをとる。「日常生活の冒険」を毎日しているのである。例えば、東京都内で車にはねられて死ぬ確率は70万分の1くらいだが、その程度の確率だとほとんど気にかけていない。

通信技術の発達はある部分において人の移動を置き換えるが、一方で増やしていく。結果は、通信量と人の移動量は両方とも伸びていく。通信量の伸びの方が速いだけだ。いくらインターネットが発達しても出来ないことはある。例えば、香港の銘記飯店のロースト・ダックをネット上の高解像度映像でみることは出来ても、あの雰囲気の中でしみじみ味わうことは経験出来ない。「情報の過剰消費」だけで我々は生活していない。

では今後はどうなっていくのだろうか。ここでアジアにおける情報、文化、人の移動に関して一つの将来仮説を提示する。それは、ヨーロッパ人と同じような意味での「アジア人」という概念が段々と形成されていくと同時に極めて強いナショナリズムと対抗意識が底流に流れるという精神の二重構造になるであろう。それはよい方向にも悪い方向にも働く可能性がある。

従って、自然発生的な流れに対して明確な意思を持ってある方向に持っていく努力が必要であろう。それは規制という形を取ることは出来ない。また、理想主義も意味を持たない。人々の郷党意識は絶対になくならない。小さなスケールから大きなスケールまで対抗心は常に存在する。だから阪神の優勝で感涙に咽び、サッカーのワールド・カップは盛り上がる。

どれだけ人が移動し交流が盛んになると、内と外の境はなくなる。よそ者は常によそ者である。そのアウトサイダー感覚が創造性にプラスになることも多い。取り込まれてしまって特徴を失うより「やはり野に置け蓮華草」かもしれない。「国際人」や「コスモポリタン」がすでに陳腐な表現であるように、

個々人の文化的アイデンティティは好むと好まざるに関係なくそう簡単には変わらない。

国内外を問わず極めて当たり前の人間の自然な感情、歴史的伝統、歴史的背景、距離感などを前提として個々人が行動すべきだ。そのような常識が「アジア人」に出来てくることが望ましい方向だ。日本人対韓国人対中国人対シンガポール人対タイ人ではなく個々人の固有名詞が重要だとの認識が広がっていくことが望ましい。

最近ソフトパワーの重要性、そして、いい表現とはとても思えないが、グロス・ナショナル・クール（GNC）という考え方を通じて日本の大衆文化の影響力、特にデジタル技術の時代のコンテンツの豊富さを評価する傾向がアメリカにある。それは漫画やアニメ、テレビゲームなどである。それに日本の若者向けファッション、キャラクター・グッズ、ポップソングなども以前からアジアで広がっている。

この流れを新たな日本の覇権主義と取る向きがある。GNCと名づけたダグラス・マクグレイは The Pokemon hegemon と呼んでいる。しかし果たしてそうだろうか。「ソフトパワー」を定義したジョーゼフ・ナイを含めてアメリカ人のメンタル・セットの限界を感じる。彼らの理解はアメリカがそうであるように大国イコール覇権主義なのである。日本が世界の歴史上初めてともいえる「覇権主義でない大国」であることがアメリカ人、そして、我々日本人自身にも中々理解できてない。

日本人自身が理解していないのだから、当然のことに、アジア諸国の人々はかつての覇権主義国家日本がいつまた目覚めるかと疑っていて、そうでない日本を受け入れるのに慎重である。確かに、5兆円の防衛予算（軍事予算の婉曲表現だが）と技術力からいうとアジア最大の軍事大国でもあることは忘れてはいけない。しかし、歴史は繰り返さない。未来は過去と常に違い、不確定で意外性に満ちていると考えるのが現代の常識だ。

日本のいわゆるソフトパワーの担い手は、ダグラス・マクグレイが日本でインタビューをして驚いたように、国際的展開などほとんど考えていないし、国際的影響力など自覚していない。まして、相手国の好みに合わせて変えることなく、下世話な表現をすれば「こてこての日本」がそのままアピールする時代だとは中々理解できない。彼らはいわゆる日本の世界的大企業ではないのである。呉善花女史が言うところの、人生の達成目標などもたないで一日一つの小さな幸せで一生を送れる日本のスモール・タイマー集団といってもいい。

ではその担い手の自覚に関係なく、日本の大衆文化が何故アジア諸国をはじめとして諸外国に受け入れられる普遍性を持っているのだろうか。それは、実に日本が世界の大衆文化、特に最も影響力の強いアメリカの大衆文化を別に輸入制限することもなく受け入れてきたからである。日本政府の産業保護育成政策のなかに大衆文化産業は入っていなかったのは幸運だ。ただ、カタカナ言葉がはびこっている割には英語がうまくならないのは不思議でもある。

文化は無限のレイヤーによる重層構造である。「イタメシ」も食べれば回転寿司も食べる。「数百年の伝統」とも関係ないのである。例えば、江戸時代の落語に焼き鳥は出てこないはずだ。焼き鳥は100年の歴史もない。東南アジア

で一般的なサティが発祥だという。しかし、サティとは串刺しであること以外はまったく違うものに焼き鳥はなっている。

外来物も好みに合えば恐ろしいスピードで日本化する。そのごった煮状況から生み出されるコンテンツをすぐに受け入れる購買力のある若者層が極めて厚いということが幸いしている。首都圏の持つ集積度と日本の経済的豊かさのおかげである。そして、諸外国に比べると異常に多いのだが、20歳代の親子同居による「自立しない若者」の可処分所得の高さも貢献している。

このような形で生み出される日本のコンテンツをアジア諸国はどう受け入れるかが一つのテーマになる。それを「文化的侵略」と見て制限するか、あるいは自国の文化の持つ底力を信じて受け入れ、双方向の流れに持っていかの決断が迫られる。アジア諸国は長い歴史に基づいた伝統文化を生活の底流に持っているのだから、客観的には日本が発展途上国時代を通じてほとんど無防備であったような状況においてもそれほど問題が起これば考えにくい。

物事は逆説的であって、実は開放した方が自国の潜在的タレントが触発され自国の文化的伝統を無意識に融合しながら新しいものを生み出し、しかも大容量通信のデジタル世界が提供する国境のない市場を活用しながら多面的双方向に広がっていくことが起こるはずだ。そのような「アジアのごった煮大衆文化」の中で育った世代が将来本当の意味で、いわゆる「アジア人」になっていくのだろう。

しかし、現実はそのような将来を受け入れる心理状態にアジア諸国の政府は達していない。日本はすでにこだわらなくていいことにはこだわらず、こだわるべきことにこだわるフェーズに入った。「欧米先進国」の持っているものはすべて日本でも出来ることを証明する時期は終わり、世界最高のバスケット・ボールを作っているが、世界最強のバスケット・ボール・チームは出てこないし、世界最良のワインも作れないことを今は受け入れている。アジア諸国は日本の経験よりもっと早くその段階に達する可能性はあり、その方向へ意識して持っていくべきだ。

そして類は友を呼び、知的、経済的、感覚的刺激のある環境を求めて、特に若く活動的年齢層は移動する。その様な刺激的環境は集積度の高いいくつかの地域へ自然に集中するだろう。当然首都圏はその候補の第一に挙げられる。しかし、文化や情報を受け入れるのに制限をしない日本はこと人の受け入れになると極めて保守的になる。

アメリカは人も文化も受け入れ、フランスは人を受け入れるが文化を受け入れないのに比較すると、日本は文化を受け入れるが人を受け入れない。移民を受け入れるには膨大なシステムが準備されないといけないし、それ以前に政治的プロセスで長い時間を取られる。しかし、現状と移民受け入れの間に外国人の短中期滞在を可能にする色々な解があるはずだ。例えば、アメリカのグリーン・カードの改良版が考えられる。

これからのファッション市場はアジアが最大であり、ファッション・デザインのセンターはパリやミラノから東京に移る可能性は極めて高い。すでにその兆候はある。しかし、アジア諸国の若者が東京にファッションの勉強に来て、そ

の後も日本で当分活躍し、後は自国と東京をいったり来たりするような自由度が今十分あるかということそうでもない。

犯罪的な部分は SARS に対してそうであったように国家が押さえ込みに機能するという前提を置くことが可能であれば、人や情報、文化の流れに制限を加える必要はないはずだ。物事は常に双方向であり一方的に押し込まれるのではないという現実即した「生活の知恵」が広がるのが望ましい。アニメやコスプレなどの日本語英語がまた英語になってきている。寿司のカルフォルニア巻きも悪くない。文化は時間とともにいったり来たりする。

ニホンザルの純粋種はもはや下北半島の一部しかいなくなり、日本にいるその他の猿はすべて台湾猿との混血だそうだが、このことに関しては台湾猿だけでなくニホンザルも積極的であったのではないだろうか。お互い様である。

しかし、最後に残るのは共通言語の問題である。人や情報、文化の交流は言語に依存しない部分もあるが、言語依存の側面は大きい。その場合、アジアの共通言語は何になるのだろうか。言語の歴史は多数の言語が消え、集約していく流れであるが、未来もその延長にあるのだろうか。多分違うだろう。ではどうなるのか。

アジアの共通語はやはり英語になるだろう。英語はかつて東南アジアでピジョン・イングリッシュを生んだようにフレキシビリティが高い言語である。従って共通語として英語が使われるが、その流れの中で「アジア英語」が出来上がっていくのではないだろうか。それはアメリカ英語からスタートしながらもかなり特徴のあるものになっていくだろう。

現在のアメリカ英語は、発音は 18 世紀のイギリス英語のままで凍結しているが、新しい単語や人々の価値観に影響のある表現を作り出す力はイギリス英語より強い。黒人を含めてエスニックな表現を取り入れながら多様性のあるアメリカ英語を作り出している。

それと同じようにアジアそれぞれの国が作り出す新語や表現が交じり合った、アクセントの違いに対して許容幅の大きい、多分、スペルも新しいものに換わってしまう「アジア英語」が半世紀ぐらいで出来上がっていくのではないだろうか。そのような英語をしゃべる「アジア人」たちをアメリカを中心とする西洋の既存のエスタブリッシュメントがどう受け止めていくかは極めて面白い問題だ。